

**O-0601****軽症脳梗塞患者における急性期病院入院中の身体活動量と身体活動セルフ・エフィカシーとの関係**

北村 友花<sup>1)</sup>, 野添 匡史<sup>2)</sup>, 金居 督之<sup>1)</sup>, 久保 宏紀<sup>1)</sup>, 山本 美穂<sup>1)</sup>, 古市あさみ<sup>1)</sup>, 島田 真一<sup>3)</sup>, 間瀬 教史<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>伊丹恒生脳神経外科病院リハビリテーション部, <sup>2)</sup>甲南女子大学看護リハビリテーション学部,

<sup>3)</sup>伊丹恒生脳神経外科病院脳神経外科

**key words** 脳梗塞・急性期・身体活動セルフ・エフィカシー

**【はじめに, 目的】**

歩行が自立しているような軽症脳梗塞患者における身体活動量 (Physical Activity: PA) の減少は, 身体機能低下を招くだけでなく疾患の再発リスクを増加する可能性が指摘されている。この PA の低下は脳梗塞発症に伴う入院を契機に生じることは容易に想像がつくが, 軽症脳梗塞患者における急性期病院入院中の PA についてはこれまで報告されていない。また, 近年は糖尿病患者や冠動脈疾患患者における PA と身体活動セルフ・エフィカシー (Self-Efficacy for Physical Activity; SEPA) との関係が報告されているが, 急性期脳梗塞患者を対象とした報告はほとんどない。本研究の目的は, 軽症脳梗塞患者における急性期病院入院中の PA を測定し, 身体機能や SEPA との関係について検討することである。

**【方法】**

対象は 2014 年 7 月から 10 月の間に伊丹恒生脳神経外科病院へ救急搬送され入院理学療法が処方された非心原性脳梗塞患者のうち, 病前より歩行が自立しており, 発症後 1 週間以内に院内歩行自立となったものとした。除外基準は, 脳梗塞の症状以外で明らかに身体活動を阻害する因子を有する例, 認知機能低下に伴って身体活動量の測定協力が困難な例, 研究参加に同意を得られない例とした。PA の測定は安静度として院内移動が許可され本人の同意が得られた日から 1 週間, 各対象者に睡眠活動量計 Fitbit One (Fitbit 社製) を装着して行った。また, PA 測定開始日に身体機能評価 (Time Up & Go Test (TUG), 等尺性膝伸展筋力), SEPA 評価 (岡ら (2002)) を行った。理学療法・作業療法は各対象者の心身機能もしくは活動能力の改善を図ることを目的に, 筋力トレーニング, 全身持久力トレーニング, 屋外歩行練習を中心に実施した。各療法実施者は療法実施時に PA 測定機器の装着状況のみ確認し, 各対象者に対して特別な指示は行わなかった。解析は理学療法もしくは作業療法を実施した連続 4 日間を対象とし, 各日ともに PA はリハビリテーション実施時間中の PA (リハ時 PA), リハビリテーション非実施時間中の PA (非リハ時 PA) に分けた値も算出し, 各 PA について 4 日間の平均値を算出した。得られた PA は平成 24 年度国民健康・栄養調査における各年代・性別における PA と比較した。また, PA および非リハ時 PA と身体機能・SEPA (SEPA 下肢項目及び SEPA 上肢項目) との関係についてスピアマンの順位相関係数を算出した。統計学的検定は SPSS ver. 20 を用いて行い, 有意水準は 5% 未満とした。

**【結果】**

対象となったのは非心原性脳梗塞患者連続 13 例 (全例ラクナ梗塞, 男性 8 例, 女性 5 例, 平均年齢  $66.5 \pm 6.9$  歳), NIHSS は  $1.3 \pm 1.0$  であった。4 日間の平均 PA は  $3784 \pm 1611$  歩, リハ時 PA は  $1588 \pm 904$  歩, 非リハ時 PA は  $2196 \pm 1199$  歩であった。各年代・性別の全国平均 PA と対象者の PA を比較すると, 全例全国平均値を下回っていた (全国平均 PA の 57%)。PA 及び非リハ時 PA と TUG, 膝関節伸展筋力, SEPA との相関関係をみると, PA は SEPA 下肢項目のみ有意な正の相関を認めた ( $r=0.74, p=0.004$ )。また, 非リハ時 PA については, SEPA 下肢項目 ( $r=0.80, p=0.001$ ), SEPA 上肢項目 ( $r=0.59, p=0.03$ ), 年齢 ( $r=-0.59, p=0.03$ ) と有意な相関を認めたが, 身体機能 (TUG, 等尺性膝伸展筋力) については有意な相関は認められなかった。

**【考察】**

本研究結果より, 歩行が自立している軽症脳梗塞患者の急性期病院入院中 PA は低下しており, リハビリテーションの介入がなければさらに低下する可能性が示唆された。また, PA および非リハ時 PA と共に身体機能との関係はなく, 強い相関がみられたのは SEPA 下肢項目のみであった。このことから, たとえ身体機能が高くても歩行や階段昇降といった移動に関する自己効力の低い急性期脳卒中患者では入院中の身体活動量は低下しやすいと考えられた。

**【理学療法学研究としての意義】**

本研究結果は急性期軽症脳梗塞患者に対して身体活動量に着目した理学療法を実施する上での基礎的データになる。